

2023 年 6 月 25 日（日）「心の戸を叩く音 ～生ぬるかったラオデキア教会～」

ヨハネの黙示録 3:14-22

14 ラオデキアにある教会の天使に、こう書き送れ。『アーメンである方、忠実で真実な証人、神に造られたものの源である方が、こう言われる。15 「私はあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。16 熱くも冷たくもなく、生温いので、私はあなたを口から吐き出そう。

17 あなたは、『私は裕福で、満ち足りており、何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。18 そこで、あなたに勧める。豊かになるように、火で精錬された金を私から買うがよい。自分の裸の恥をさらさないように、身にまとう白い衣を買い、また、見えるようになるために目に塗る薬を買うがよい。19 私は愛する者を責め、鍛錬する。それゆえ、熱心であれ。そして悔い改めよ。

20 見よ、私は戸口に立って扉を叩いている。もし誰かが、私の声を聞いて扉を開くならば、私は中に入って、その人と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするであろう。21 勝利を得る者を、私の座に共に着かせよう。私が勝利し、私の父と共に玉座に着いたのと同じように。22 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。』』

【序論】

黙示録 2～3 章に出てくる七つの教会の最後、ラオデキア教会へのメッセージから学んでまいりましょう。一聖書読者として最も印象に残ってきた教会であり、また夫婦の会話の中でもよく話題に上る教会であります。

今日の箇所は「生ぬるい」が一つのキーワードであります。皆様は生ぬるいものがお好きでしょうか。私は何か飲み食いするときに、熱いものは熱々がよく、冷たいものはキンキンに冷えているのが好きなのですが、妻は基本的に生ぬるいのが好きだそうです。体にとってはほどほどの方がいいようで、熱いものばかり食べていると食道に負担がかかるといいますし、起きてすぐに冷たいものを飲むと胃腸がビックリすると言われます。そういうわけで妻の趣向の方が健康的には良いのですが、分かっているながらもなかなか変えていくことができません。私が生ぬるいものがあまり好きでない理由は、保育園の頃に毎日のように出てきた牛乳がいつも生ぬるかったからで、匂いも味も好きではなく厭々飲んでいたのでよく覚えています。

ラオデキア教会の霊的状态は熱くも冷たくもなく生ぬるかったことで、主イエスから厳しく叱責を受けています。信仰的に「生ぬるい」とはどういう状態なのだろうか。「熱い信仰」なら理解できるが、「冷たい信仰」はどうして良いと言えるのか。自分の信仰は今どういう状態なのだろうか。もし主イエスが当教会に宛てて手紙を送ってこられたとしたら、どのような内容であろうか。そのようなことを考えながら今日のテキストに取り組みました。

【本論】

本論 1. ラオデキアという町

まずは「ラオデキア」という町について調べてまいりましょう。この町は、紀元前3世紀のセレウコス王朝時代にアンティオコス2世(前261-前246年)によって建てられました。彼の妻ラオディケーに因んで「ラオデキア」と名づけられたようです。一時的にペルガモ王国に属しましたが、紀元前133年にはローマの支配下に入りました。



地理的には現代におけるデニズリに当たり、七つの教会のうちでコロサイに最も近く、コロサイに宛てられた手紙はラオデキアでも読まれたということが分かっています。

この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるようにしてください。また、あなたがたもラオディキアから回って来る手紙を読んでください。(コロサイ 4:16) ラオデキアは銀行業で栄えた町で、その他にも毛織物業、特に黒い羊の毛で織った布地、衣類、絨毯、更にローマ帝国全体で使われた目薬を製造したことでも有名でした。因みに、この目薬は錠剤状のものだったようで、後で出てくる「目薬を買いなさい」という言及と関わりがあると考えられています。

ラオデキアはフリギア地方で最も経済的に富んだ町であり、紀元60年に起きた大地震の被害のときも、ローマからの援助なしで町を再建しました。一方、弱点としては十分な水の供給がなかったことで、この点も「熱いか冷たいか」の言及の元になっているようです。

本論 2. 主イエスの自己称号

ラオディキアにある教会の天使に、こう書き送れ。『アーメンである方、忠実で真実な証人、神に造られたものの源である方が、こう言われる。(3:14)

主イエスが各教会に対して宣べる自己称号には、その教会が直面している状況と何らかの関係があります。ここでは三つの称号が並べられています。

① アーメンである方

「アーメン」(ᾠη)とは、私たちがお祈りの最後に唱和することですが、「まことに」「本当に」「そうであるように」という意味です。イザヤ書にこのような聖句があります。

この地で祝福を求める人は、真実の神によって祝福を求め、この地で誓う人は真実の神によって誓う。(イザヤ 65:16)

ここに出てくる「真実」ということばは原語では「アーメン」であり、「アーメンなる神」すなわち完全に信頼できる神であることを意味します。それが今日の箇所でも使われているということは、主イエスがことばにおいて偽りのない方であることを言い表しています。

② 忠実で真実な証人

ここで言われていることは、「アーメンである方」とほとんど同じです。「証人」(μάρτυς)は「殉教者」をも意味しますので、主イエスが死に至るまで神に対して忠実であられたことを暗示しているでしょう。

③ 神に造られたものの源である方

「源」(ἀρχή)は「初め」とも訳せますが、ニュアンスとしては創造主なる神としてのイエス・キリストを伝えている。父なる神と共に万物を創造した神であると。

以上、三つの称号がラオデキアの教会に宣言されましたが、主イエスはこれによって何を言おうとしているのか。ここには「慰め」よりも「厳しさ」が感じられます。万物を「ことば」によって創造された方は、すべてのことばを成就される。すなわち、「これから語られることばを心して聞け」ということが言われているのでしょう。

本論 3. 生ぬるい信仰

私はあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。熱くも冷たくもなく、生温いので、私はあなたを口から吐き出そう。(3:15-16)

ラオデキア教会の状態について、主イエスはオブラートに包むことなく「熱くも冷たくもない」「生ぬるい」と糾弾します。水の温度にすることが言われていますが、「熱い」についてはヒエラポリスの温泉、「冷たい」についてはコロサイの冷たい飲料水が念頭にあるよう

です。当時の人々の感覚として、温泉は熱いお湯が求められ、飲み水は冷たくリフレッシュできるものが求められたのでしょう。そのどちらをも満足させることがない。何と中途半端なあり方かと言われているのです。

ラオデキア教会の具体的な状況については、17 節で「私は裕福で、満ち足りており、何一つ必要な物はない」と言っているところから理解できます。この教会は、町の経済的繁栄に乗じて十二分に満たされた状態にあったのです。困るところがなく、神に求める必要がなかった。自分たちの力で、お金の力でどうにでもなると考えていた。

社会が経済で回っている以上、人はお金を必要とします。それを得るために努力し、豊かな生活を求めて働く。しかし、教会活動がお金を得ることを中心に動き始めるとおかしなことになっていくのです。宣教へのハングリー精神が失われたとき、どこか歪みが生じ始める。

4 世紀初頭のローマ皇帝にコンスタンティヌス 1 世という人がいましたが、この時代にキリスト教は国教となり、かつての帝国によるキリスト教弾圧とは真逆の様相を呈しました。苦しんできた信徒たちは「ついに勝利を得た」と歓声を上げましたが、迫害がなくなった時期から教会は分裂と墮落へと向かい始めたのです。不思議なことなのですが、教会は世との戦いの中にあるときにこそ主の力を受けるのです。

ラオデキアの教会からは霊的感觉が失われ、宣教の意欲はなく、現状維持、怠慢、無関心の空気が漂っていた。そして怖いことに、霊的感觉を失った人（教会）は、自分ではなかなかその現実に気がつかないのです。深い眠りの中にあるのかもしれない。

本論 4. ラオデキアの信徒の現状

自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。(3:17b)

主イエスは、この経済的に豊かな教会に対し、「わたしの目にはこのように映っている」と言われます。ここには5つの表現が出てくる。

- ① 惨めな者
- ② 哀れな者
- ③ 貧しい者（「火で精錬された金」と関係）
- ④ 目の見えない者（「見えるようになるために目に塗る薬」と関係）
- ⑤ 裸の者（「自分の裸の恥をさらさないように、身にまとう白い衣」と関係）

立派な教会堂、壮麗な礼拝式とは裏腹、中身がない。人は集まり、聖書は朗読され、祈りはささげられているが、実がないのです。かつての旧約イスラエルの状態を思い起こさせます。

もう二度と空しい供え物を携えて来るな。香の煙はまさに私の忌み嫌うもの。新月祭、安息日、集会など不正が伴う集いに私は耐えられない。(イザヤ 1:13)

ここには宗教の形骸化の問題がある。指定されたルールに従って礼拝の儀式を行なっているが、形ばかりで心が伴っていないのです。実生活の中に信仰が現れていない。何のための礼拝だか分からない。ラオデキアの教会はそれと似ていました。

本論 5. 主の勧め

「惨めさ」「哀れさ」「貧しさ」「盲目」「裸」とは、物質的な意味ではなく霊的な意味で言われています。誰もが羨むような物質的豊かさの裏側には空っぽの霊性があった。主はこの教会に何としてもいのちを取り戻させたいと願い、いくつかの提案をします。

そこで、あなたに勧める。豊かになるように、火で精錬された金を私から買うがよい。自分の裸の恥をさらさないように、身にまとう白い衣を買い、また、見えるようになるために目に塗る薬を買うがよい。私は愛する者を責め、鍛錬する。それゆえ、熱心であれ。そして悔い改めよ。

(3:18-19)

主が「私から買え」と言っておられる三つのもの：

① 火で精錬された金

ラオデキアの信徒たちは、物質的な金の装飾品やアクセサリーを持っていたと思われます。金は価値あるものであった。しかし主は、霊的な「金」、すなわち主イエスにしか与えることのできない「混じり気のない信仰」、全く神に依り頼む幸いな人生を取り戻させようとしているのです。

② 自分の裸の恥をさらさないように、身にまとう白い衣

ラオデキアの信徒たちは、黒い羊の毛で作った高価な衣服を身に纏っていたのかもしれませんが。そして、それを誇っていたのかもしれない。しかし、そのような装飾品は主の目に価値あるものではなかった。むしろ、主イエスにしか与えることのできない衣服、すなわち「キリストの義」を身に纏うことを求めておられる。

③ 見えるようになるために目に塗る薬

これもまた、目薬によって繁栄したラオデキアの町、そこに住む信徒たちへの一種の皮肉と言えるかもしれません。「あなたがたは実は盲目なのだ」と言われる。そして、主イエスにしか与えることのできない目薬、すなわち「霊的な開眼」を勧めておられます。

本論 6. 悔い改めた者への約束

見よ、私は戸口に立って扉を叩いている。もし誰かが、私の声を聞いて扉を開くならば、私は中に入って、その人と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするであろう。勝利を得る者を、私の座に共に着かせよう。私が勝利し、私の父と共に玉座に着いたのと同じように。(3:20-21)

これまでラオデキア教会に対して語られてきたメッセージの内容は厳しく、16 節では「**私はあなたを口から吐き出そう**」とまで言われていました。「吐き出す」とは、関係を断つこと、キリストと無縁の教会になるということ、教会が教会でなくなる（ただの人の集まりと化す）ということです。しかし、主はこのように述べながら、「そうはしたくない」という切実な思いを抱いておられる。主が彼らに願っていることは、ご自身に立ち帰ること、霊の目を醒ますことです。

「戸口に立って扉を叩く」という表現は大変分かりやすい。教会の外に締め出された主が「わたしを中に入れておくれ」と戸を叩いている姿を思い浮かべるとよいでしょう。このことはもちろん個人レベルでも起きることであり、心を閉ざしてしまった信者の心をノックする主イエスがおられます。ここで重要なことは、主が戸を叩いておられる相手が未信者ではなく信者であるということです。そして、その音は、愛の響きを持つと同時に、時が迫ってきていることをも告げています。呼びかけに応じることのできる時間が少なくなっているのです。

呼びかけに応じる人に対して、主はここでも二つの約束を与えられます。

① 私の声を聞いて扉を開くならば、私は中に入って、その人と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするであろう

食事を共にするとは、両者の間に平和があるということ。その人は、主イエスとの関係を取り戻したのです。そして、天の饗宴に招かれることになる。

② 勝利を得る者を、私の座に共に着かせよう

主が十字架において勝ち取った王権、神の位に就いて宇宙的支配者となられる栄誉が、信者にも分け与えられる。その人は主イエスと共に永遠の神の国を治める。

【結論】

霊的危機というものは、信仰生活に少なからず伴うものです。今日はその要因として、「神に求める必要のない状態」が示されました。私たちは、主に信頼することを差し置いて自分で行動してしまうことがあるのです。

私は大学時代に水曜日の夜の祈祷会を休んでアルバイトをしていた時期がありました。そのことを叱ってくれた先輩がいました。お前が第一としているものとは何だと。その声を退けて同じ生活をしていたとき、災いが降りかかりました。一生心の傷になるような痛ましい経験でした。しかし、それを通して私は主に立ち返ったのです。主に立ち返り、主を第一とした生活を取り戻していったとき、必要なものは自然と満たされるようになりました。この経験は、私の心に焼き印のように押されています。主が一人ひとりの心の扉を叩いておられる。その音を見逃し続けることなく、扉を開きましょう。

【祈り】

心を尽くして主を愛することを求め給う、天の父なる神様。ラオデキアの教会に対する「吐き出す」ということばは厳しく、そのように書き送られた教会は震え上がったことでしょう。しかし、そのことばによって心の目が醒まされたのではないのでしょうか。私たちの心のあり方も問われています。熱いか冷たいか、はたまた生ぬるいか。願わくは、主を愛することにおいてどこまでも篤くあらせてください。この世のものを得て満足することなく、主との交わりにこそまことの喜びを見出すことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、ご自身を愛することを求め給う、
父なる神の愛、
眠りの中にある心の扉を叩き、霊的交わりを取り戻させ給う、主イエス・キリストの恵み、
主を迎え入れた者を、天の饗宴に招き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。